

広島大学旧理学部 1 号館の建物概要について

1 建物概要

|       |                                                                              |
|-------|------------------------------------------------------------------------------|
| 所在地：  | 広島市中区東千田町一丁目                                                                 |
| 設計者：  | 文部省会計局                                                                       |
| 施工年：  | 昭和 6 年（1931 年）※今年で築後 85 年となる。<br>[昭和 8 年(1933 年)に一部を増築]                      |
| 構 造：  | 鉄筋コンクリート造                                                                    |
| 基 礎：  | 直接基礎                                                                         |
| 建物規模： | 地上 3 階<br>(建築面積 2,800 m <sup>2</sup> 、延床面積 8,500 m <sup>2</sup> )            |
| 外部仕上： | 基礎 花崗岩<br>(建設当時) 外壁 スクラッチタイル<br>窓 木製<br>(補修により一部スチールサッシ)<br>車寄 花崗岩石積、鉄扉      |
| 内部仕上： | 玄関廻 床 モザイクタイル<br>(建設当時) 腰壁 大理石<br>壁 漆喰塗<br>内部一般 床 モルタル金こて<br>壁 漆喰塗<br>天井 漆喰塗 |



戦前の広島文理科大学  
(広島市公文書館所蔵（提供）)

2 建物の略歴

|                   |             |                                                           |
|-------------------|-------------|-----------------------------------------------------------|
| 建設から<br>被爆まで      | 昭和 6 年      | 広島文理科大学（昭和 4 年開校）の本館として完成                                 |
|                   | 昭和 8 年      | 増築されて E の字形になる                                            |
|                   | 昭和 20 年 6 月 | 3 階部分と 2 階の一部が、中国地方総監府（本土決戦に備え、本土分断の際にも自立できるための地方行政機構）に接收 |
|                   | 昭和 20 年 8 月 | 被爆（敷地は爆心地より南南東 1.4km の地点）、火災発生                            |
| 被爆後の<br>建物利用      | 昭和 21 年 9 月 | 講義を本格的に再開                                                 |
|                   | 昭和 24 年 5 月 | 学制改革で広島大学に包括され理学部校舎として使用開始                                |
|                   | 昭和 33 年     | 改修工事（壁の一部は、東広島キャンパスで保存）                                   |
| 東広島キャンパス<br>への移転後 | 平成 3 年      | 理学部が東広島キャンパスへ移転<br>(玄関の鉄扉中央の飾り物と、取り付け丁番は、東広島キャンパスへ移設)     |
|                   | 平成 6 年      | 被爆建物等台帳登録                                                 |
|                   | 平成 25 年 4 月 | 本市が建物及びその敷地を独立行政法人国立大学財務・経営センター<br>(当時) から無償取得            |

3 被爆建物としての位置づけ

広島大学旧理学部 1 号館は、「広島市被爆建物等保存・継承事業実施要綱」第 4 条に基づいて、平成 5 年度に台帳登録されており、その内容は次のとおりである。

- ・被爆時の名称：広島文理科大学
- ・所在地：中区東千田町一丁目 1-89
- ・爆心地からの距離：1,420m

【参考】広島市被爆建物等保存・継承事業実施要綱

第 4 条 保存・継承の対象となる被爆建物等は、建物及び橋りょうにあつては爆心地から 5 キロメートル以内に現存するものの中から、樹木にあつては爆心地から 2 キロメートル以内に現存するものの中から、市長が被爆の事実を調査把握したものとする。

4 広島大学旧理学部 1 号館にあったものを広島大学東広島キャンパスへ移設して保存している部分

(1) 被爆壁面について

タイルに付着している血痕は、暗黒となった校舎の中から傷つきながらも九死に一生を得て這い出してきた人達が、1 階廊下の北出口付近の壁面に残していたものである。

このタイルは、昭和 33 年 11 月校舎を改修するために取り除かれることになった。当時の動物学教室主任川村教授は、これを永久に保存することを考え、二基の衝立に組み立てた。(東広島キャンパスの広島大学旧理学部 1 号館被爆壁面説明文より抜粋)



← 広島大学東広島キャンパス  
本部棟展示室



理学部講義棟展示室→

(2) 鉄扉中央の飾り物等について

平成 3 年夏、理学部の移転の際、正面玄関の鉄扉中央の飾り物（真鍮製）と、取り付け丁番（砲金製）を被爆した扉からそのまま移設した。(東広島キャンパスの統合移転地理学部建物模型説明文より抜粋)



鉄扉の飾り物(拡大)



取り付け丁番

← 広島大学東広島キャンパス理学部講義棟に移設された  
鉄扉中央の飾り物と、取り付け丁番

## 5 広島大学旧理学部 1 号館において被爆当時のまま残っていると推測される部分

建設当時と現在の建物の状況比較や、「広島県の近代化遺産 - 広島県近代化遺産（建造物等）総合調査報告書」、「ヒロシマの被爆建造物は語る 被爆 50 周年 未来への記録」及び「広島原爆戦災誌第四巻」（次ページ参照）の記載内容から、次の部分が被爆当時のまま残っていると推測される。

- ・ 軀 体：柱、梁、壁など建物の主構造部分
- ・ 建物外部：スクラッチタイル、基礎（花崗岩）、玄関の花崗岩積柱、バルコニー
- ・ 建物内部：玄関の腰壁（大理石）



戦前の広島文理科大学  
（広島市公文書館所蔵（提供））



現在の広島大学旧理学部 1 号館



建物外観（正面）



建物外観（背面）



外 壁（スクラッチタイル）



基礎（花崗岩）



正面玄関



玄関内部

6 関連資料における記載内容

(1) 「広島県の近代化遺産 - 広島県近代化遺産（建造物等）総合調査報告書 - : 広島県教育委員会(平成 10 年 3 月)」

広島市街の中心近くに存し、広島大学が東広島市へ統合移転するまで本部が置かれていた構内に建っている。

この建物は、昭和 6 年（1931）に竣工した広島文理科大学の本館であった。広島文理科大学は、昭和 4 年（1929）に設置された官立大学で、同年に本館の新築工事が着工されている。昭和 20 年（1945）の被爆を経て、同 24 年（1949）に広島大学が設置されて広島文理科大学を包括している。近年まで広島大学理理学部の校舎として使われてきた。

原爆の爆心地からは東南 1.3km で、爆風によって窓や出入口が破壊され、その後、周囲の木造建築の火災によって延焼し、建物内部の大部分を焼失した。戦後に修復されたが、建物の老朽化と被爆時の火災によって、外壁や内装材の劣化が著しく、タイルやモルタルの剥落箇所が多い。

中廊下式のヨの字形平面をなす大規模な建築で、鉄筋コンクリート造の三階建である。正面間口は 78.5m、左右両翼の奥行は 55m に達する。延床面積は、10,023.8㎡である。構造はラーメン式であり、外壁は磁器タイル張り、内壁は漆喰塗り（現状）とする。陸屋根を持つ。

左右両翼と正面本体とをコの字形に配置し、正面本体の中央後方にも別棟を接続しており、全体でヨの字形平面となる。全体が中廊下式で、その両側に研究室や教室を並べている。正面中央に玄関があり、風除室を経て玄関ホールに至る。玄関ホールの左右に階段が取り付け重厚である。左右両翼の階段室では、階段が 45 度振って設けられている。平面計画上では見るべき点が乏しいが、階段の設計には注意が払われているようである。

外観は赤褐色の磁器タイルを張り詰めた大壁造であって、上下階で位置と大きさを揃えて窓を整然と配置している。窓は縦長で、鋼製の上げ下げ式である。1 スパンに二つずつの窓を配し、柱の有無にかかわらず、窓間の距離を一定としており、その結果、三階分の大壁全体に同じ調子で窓が並ぶ。単調ではあるが、近代的な趣を見せることになる。一階窓台より下方は、花

崗岩の石張りとし、横長で安定感のある建物をさらに安定したものとしている。

正面中央の玄関付近だけは、唯一単調さを破っている。屋上のパラペットは、その部分だけ一段高く造り、その下に時計を納めている。戦前の高等教育機関によく見られる時計塔とせずに水平性を基調とした点は、この建物の特色としてよいであろう。二階と三階の窓は、三つずつを束ねて額縁を回し、中心性を強調している。その三階窓下に水平に突き出す小庇は、意匠的にはあまり成功していない。一階部分の玄関は、一般的によく行われた車寄にはなっていない。大壁造の壁面を基調とする意匠にあって唯一玄関入口の両脇だけに柱形を見せ、しかもその柱形を著しく太く造って、目地を強調した花崗岩張りとする。その柱形の隅部は丸く造り、中ほどよりやや上方で段を付けて少し柱形を細める。その段上の内側の隅は欠き取られ、燈火がはめ込まれている。重厚な花崗岩と燈火の組み合わせは、昭和初期に各地で流行した表現派意匠の一つである。柱形は二階の狭いバルコニーを受ける。バルコニーには、重厚な手摺りが巡るが、その手摺りの隅部も丸味を帯びた意匠を見せている。この建物においては、意匠のほぼ総てを玄関回りに集中させており、見せ場の中心としている。

玄関ホール内は、腰高に柱や壁に美しい大理石板を張り、床には市松模様にモザイクタイルを張っている。その上部は現状では白漆喰塗りとなっている。玄関ホール以外の部位は平凡な漆喰塗りで、見るべき所がない。

この建物は、玄関以外には大壁に角形窓を並べただけの近代的意匠を用い、意匠上の工夫を玄関回りに集中させており、昭和初期の大規模建築に多く見られる形態である。（三浦）

(2) 「ヒロシマの被爆建造物は語る 被爆 50 周年 未来への記録：広島平和記念資料館（1996 年 3 月）」

ア 本館は、被爆により外郭を残して全焼した。

イ 被爆したとき、暗闇の中を負傷者が手探りで脱出する際、壁面のタイルに血痕を残した。昭和 33 年（1958 年）それを切り取って衝立状に加工した。正面の大時計は 8 時 15 分を示したまま止まっていたが、昭和 40 年（1965 年）頃、修理不可能として取り替えられた。

ウ 昭和 60 年（1985 年）頃からタイルが壁面から剥離して落下するようになった。特に北面が激しく、頭上注意の看板と防護ネットで対処してきた。

(3) 「広島原爆戦災誌第四巻：広島市（1971 年 11 月）」

ア 被爆当時、建物は 3 階全部と 2 階の大部分約 1400 坪を中国地方総監府に貸与していた。

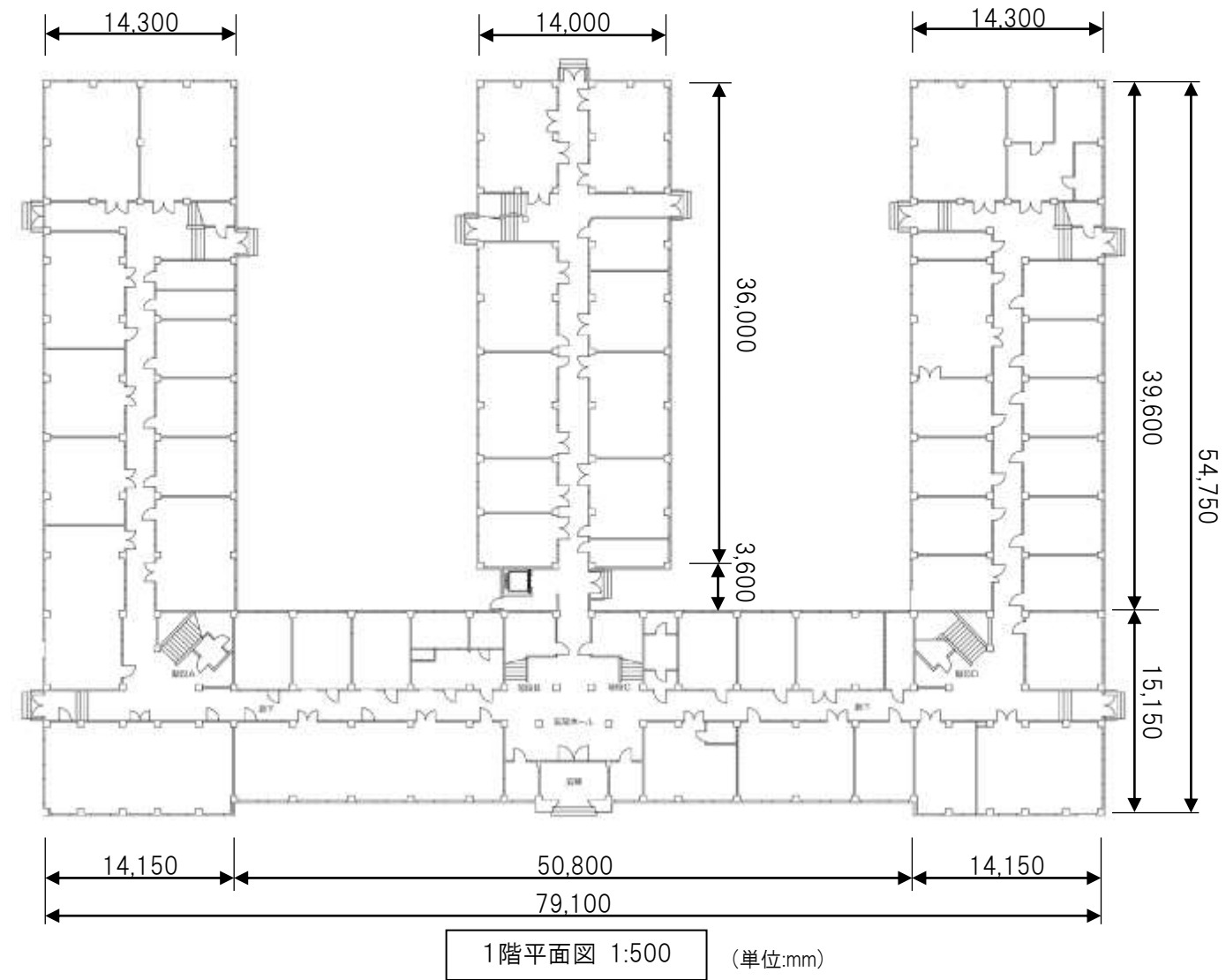
イ 被爆により窓・出口などが破損、内部焼失

ウ 午後 2 時ごろには、建物内部の大部分が焼失していた。

エ 建物内部には焼夷弾攻撃に備えて蔵書その他重要物品を格納していたが、これが数日後まで燃え続けた。

オ 即死者 36 人（教職員 16 人、生徒 20 人）重軽傷者 71 人（教職員 56 人、生徒 15 人）

7. 広島大学旧理学部1号館の平面図、西立面図及び床面積表



床面積表

| 階 数       | 面 積       |
|-----------|-----------|
| 1 階 (※1)  | 2,807.53㎡ |
| 2 階 (※1)  | 2,807.53㎡ |
| 3 階 (※1)  | 2,807.53㎡ |
| P H階 (※2) | 67㎡       |
| 合 計       | 8,489.59㎡ |

※1 吹き抜けも算入  
※2 屋上に設けられた階段室の部分

